

(ご存知の面白いエッセイなどありましたら、ご紹介ください。)

『芸術の世界の秘話 エッセイより』

ヴェルレーヌ「秋の歌」秘話

白土康代（フランス文学者）

11月を「管から弦へと移る月」と歌った詩がある。11月になると影の広がる速さが増し、空気が冷たくなり、花の色の濃さが目につくようになるが、そうした変化につれ、耳になじむ音も変化していくのかもしれない。そう思うと、秋をテーマにした曲には、管楽器より弦楽器のほうが似つかわしいような気がしてくる。

日本人に親しまれている「秋の日のヴィオロンのため息の」で始まるヴェルレーヌの「秋の歌」も、ヴァイオリンのすすり泣くような音と、風に吹き散らされあちこちに舞う落葉の音を重ねている。

この感傷的な秋の歌が戦争に使われたといえ、意外に思うだろうか。

「こちらロンドン、占領下のみなさんへ」で始まる「自由フランス」の放送は、ナチス占領下の人々をほげましたことで知られる。

明日こそ蜂蜜はブランディーになるだろう／サビーヌはおたふくかぜ／私はシャム猫が好き／ジャンの髭は長い／ブレスレットをした君は魅力的だ／トロイ戦争は起こらない

脈絡なく続く短文に続いて「秋の日のヴィオロンのため息の」がラジオから流れると、レジスタンス運動家たちは耳をそばだてた。もし二節目の「身にしみてひたぶるにうら悲し」が読まれれば、24時間以内に、連合軍のノルマンディー上陸作戦が決行されるという暗号だからである。

連合軍が助けに来てくれる。アムステルダムのユダヤ人少女、アンネの隠れ家に貼られた地図にも、連合軍の助けを待ち望み、海岸線にそって旗を立てられていたことを思い出す。

身を潜め、「身にしみてひたぶるにうら悲し」が続くのじっと待っていた人々には、もの悲しい秋の詩を、希望の詩として聞く皮肉を感じる余裕はなかったに違いない。

事務局担当より

ちなみに、第二次世界大戦における連合軍のノルマンディー上陸作戦を舞台に描かれた映画「プライベート・ライアン」は、世界中の人々に大きな衝撃を与えました。

息子3人を戦争で亡くした母・・・、残る最後の息子がまだ戦場にいることを知った連合軍司令部は、その兵士を探し、助け、母親のもとに帰す任務を、8人の兵士に命じます。しかし、その兵士を探し出すまでに、多くの兵士たちが命を落としていく矛盾、そして助けられた兵士は帰ることを拒否し、その兵士のために命を失った兵士の家族たち、双方の心境とは・・・。

『今、していることがはたして、将来どのような役に立つのか、それは未来になってみないと分からないこと。やっていることがあまりに馬鹿らしいと思えたり、あまりに小さな進歩に焦りを覚えたとしても、全てが将来につながっていく。その"将来"にあるものが何かはそのときになってみなければ分からない。けれど、そのときに振り返ってみると、あのときの小さな一歩が実は大きな一歩だったことに気がつくものです。』

1人のために・・・。(プレビューより)』